
紅砂のブラッド・ディヴァイン

名社 ミズク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅砂のブラッド・ディヴァイン

【Nコード】

N6395A

【作者名】

名社 ミズク

【あらすじ】

一流だが苦労性の剣士、わりと善人。冷徹で気性の荒い魔術師、かなり狡猾。の二人を中心に話が展開されます。異界から流れ込む魔物、そして妖魔。それらと戦う人々。傭兵。まだ出ていない主要キャラクターは冷静沈着、気まぐれな傍観者。タイトルの意味は、おいおいわかる、かも？

苦勞性剣士と冷徹魔術師、樹海編

『深淵の樹海』

白刃が閃き、

狼に酷似した姿の魔物を斜め上から瞬時に切り捨て、返す刀で二頭目の喉を抉り、わずかな、しかし俊敏な足運びで瞬時に次の魔物に相対する。

舞うような動作、しかし、そこには余分な動作や隙は全くといってよいほど無く、

芸術的な価値のある剣とはまったく趣の異なる、

そついった飾りの部分を削ぎ落とされ、

一流の鍛冶師が丹精に鍛えた

見る者に感嘆と畏敬を与える研ぎ澄まされた刃にも似た美しさがあった。

現に、用心深く、戦いの範囲に入らぬよう遠巻きに見ていた人々は剣士が魔物をあと数匹にまで数を減らすのを見て、恐る恐るだが近づき、口々に感嘆のため息を漏らした。

我関せず、と剣士からも村人達からもやや離れた場所でも木によりか

かり、
腕を組んで傍観していた魔術師は剣士の様子に不機嫌そうに眉をひそめた。

各地に点在する『深淵の樹海』、
ここに棲まう魔物は、他の場所で遭遇する平均的な魔物より格段に強力な力を持つ。

『深淵の樹海』とは異界との狭間の領域のこと。
ここは樹海自体が何らかの力を持ち、いかなるものをも喰らいつくすと言われ、
近隣の民は決して近づかないという。

だから平均的な魔物が弱いのかというと、そうでもない。

ぐるりを高い堀で囲まれた城下の町に住む富裕な民ならば魔物を目にせず一生を終えるかもしれない。

しかし、傭兵を雇うこともできず、若者を寄せ集めた自警団しか持たない

小さな村の人々にとって魔物とは、それがどれほどランクが低いものであっても、

現実には這い出でた悪夢そのもの。

凶悪な魔物に襲われるたびに村の人口は確実に減少する。
一人や二人の犠牲ですめば僥倖。

喰らいつくされ、地図から消えることは決して珍しくもない。

ここはその深淵の樹海の一つ。

ならば、この獣道を本当に獣が通っているのか、

いや、そもそもただの獣がここで生きていける非常に疑わしい。

だが、現にその部分だけ生い茂る雑草の少ない山道を
何ら気にせず、苦にもせず早歩きのような速度で行く
ほっそりとした黒ずくめの魔術師の後を追いつつながら、
これで何度目か数えるのも忘れたが、少なくとも片手の指以上と思
える懇願をした。

我ながら情けないことだ、と知らずため息が出る。

「いい加減に機嫌を直せ」

「・・・」

「そうだ、ここを抜けてリウエンに着いたらお前の好きなリーグの

香草焼きを買ってやろう」

殊勝に平謝りする剣士に、
眉をひそめつつ振り返った魔術師は薄い唇をかすかにつり上げた。

常に青ざめたように白く、
作り物のように端正なと評されることの多い魔術師の冷徹な表情は
雪解けのようにやわらいだ。

もしここに第三者が存在していれば思わずぼうつと魅入ったであろう。

が、

その表情を見た剣士はぴしっと凍り付いた。

「私を食べ物につられる性格だと思っているのか？
ふ……呆れたことだな」

魔術師の黒い瞳が悪戯っぽく輝いたと思いきや、

途端に冷淡なものに変じて剣士を射抜いた。

「……怒っているのか、イディナ」

「いや、どこがだ？なぜ、この私が怒っているのと？
とりあえず、その根拠を述べる？」

につこりと穏やかならぬ笑みを浮かべた魔術師に剣士は後ずさりか
け、

逃げ腰になる自分に気づき自制したのか一歩半で止まった。
標準装備の無表情の上を冷や汗がつつた。

「いや、その疑問符だらけの台詞からあふれんばかりの怒りを感じ
るのだが」

「私が、怒って、いると？愚かだな、セルシス？」

やれやれ、と瞳を閉じ、肩をすくめる魔術師に
セルシスと呼ばれた剣士は声に期待を滲ませた。
「違うのか？」

「違う」

その断言にわずかに肩を下げ、
かすかに口を開きかけた剣士は、それを声にする前に発言を遮られた。

「私はな、激しく、怒っているんだ」

「・・・やはり怒っていたのか」

「怒っていた、ではなく、今現在も、だ。」

それにな、激しく、という部分も忘れるなよ？

貴様は愚かにすぎるぞ。なんだ、あの依頼は。馬鹿にするにもほどがある。

・・・はん、あのようなはした金、私達の片方どころかD級の傭兵
さえ雇えるものか？

せいぜいEだ。違うか？」

剣士は睨み付ける冷やかな黒瞳に根負けしたように瞳を逸らした。

「・・・それはそうだが、あの場合は仕方がないだろう。」

あの場には俺とお前しかいなかったのだからな」

「ふん、だから雀の涙程の金しか払えぬ依頼を受けた？
魔物の気配を感じたとき、すぐ村を出ると私は言わなかったか？
あんな村に傭兵を雇う金などあるわけもなかったのだからな。
・・・お前は甘すぎる。大馬鹿者だ」

「・・・そうかもしれんな」

「まったく。愚か、とは貴様を示すことに違いあるまい。
付き合わされる身にもなってみる。次の依頼者のいるリウエンに行
かねばならないのに
正規の道を通るには時間が無いからといってこのような山道を通ら
されるわけで、
いい迷惑なのだぞ？」

眉を寄せ、睥睨する魔術師の剣幕に圧倒され、
項垂れた剣士の暗赤色の髪が脛の上にかかった。
「そうか・・・すまない」

傲慢で冷徹な視線を向けていた魔術師は、その様子に言い過ぎたと感じたのか瞳を彷徨わせ、言葉を濁した。
「あ、いや。そこまで落ち込まれるのは、
・・・まあとにかく、だな？私が言いたいのは何でもかんでも引き受けるな、ということだ。
貴様も私も全部の面倒事を引き受けていられるわけでもないのだから、な？」

「ああ、そうする」
真面目な顔つきで頷く剣士を
本当にわかつているのか？とも言いたげな目で見た魔術師は、
しかし何も言わずに背を向けた。

思わぬ時間をとってしまったとばかりに先ほどよりも速度を増し、
この道無き道をほとんど駆け抜ける魔術師に、
置いて行かれそうになった剣士は速度を上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6395a/>

紅砂のブラッド・ディヴァイン

2010年10月17日02時18分発行